ノーサイド

北原巌男

即位後初の一般参賀

5月4日朝、妻と皇居前の和田倉門到着。

既に沢山の老若男女、家族連れ、外国人の皆さんが、前の人の背中にピタッとくっつくように並んでいます。立錐の余地の無い長蛇の列。頭はどこなのか、全く見えません。自分の後ろを振り返る余地もありません。

そんな皆さんは、どこかとても明るく楽しそうに整斉とその時を待っています。

「これだけ密集して並んでいる僕たちは、まるで人間バウムクーヘンだね」

「即位後初の一般参賀の皆さんに国旗の小旗を配布するのが目的でしょ。このまま並んでいたら、どんどん時間だけが過ぎて行くわよ」

何とか所属する隊友会世田谷支部長の岩崎さんに救われて、たどり着いた隊友会の集合場所。待っていたのは、衝撃の一言でした。

「用意した10万本の小旗は、配布を完了しています」この時間で完了とは！

でも、次から次へ途切れることなく祝福に押し寄せる皆さんがいます。そうした皆さんの気持ちに、少しでも応えて行く術を見出して行かなければなりません。

東京都隊友会の松下事務局長が卓越された統率力を発揮。隊友会会員とその家族、約50名のボランティア集団は、支援を求める他の団体活動を組織的かつ積極的にサポートし、沢山の新たな小旗の準備や配布に全力で取り組みました。

そして夕刻のテレビ。小旗を振っている14万人を超える沢山の皆さんに、両陛下が笑顔で応えていらっしゃいます。

「このたび、剣璽等承継の議、および即位後朝見の儀を終えて、きょう皆さんからお祝いいただくことをうれしく思い、またこのように暑い中、来ていただいたことを深く感謝いたします。ここに皆さんの健康と幸せを祈るとともに、我が国が諸外国と手を携えて、世界の平和を求めつつ、一層の発展を遂げることを心から願っております」

一般参賀を取材した記者は書きました。

「…59歳での即位だ。同世代は仕事に一区切りつけ下山をする頃合いだ。が、新たな山頂を望み、靴ひもを結び直す境地だろう。皇后さまの体調不良など、過去の道程にはご心痛もあった。だからこそ到達できる象徴像がある。人々の歓呼の中でそう感じた」（5月5日付け日本経済新聞「春秋」）

天皇陛下のご即位については、新聞各紙が多方面から大きく報道しています。

私が最も思いを強くしたのは、5月2日付け日本経済新聞編集委員井上亮さんの署名入り記事でした。曰く、

「…過去の記者会見録をひもといて感じるのは、陛下の家族愛だ。長い療養が続く皇后雅子さまを『支えになってくれている』といたわり続け、愛子さまの成長に対する喜びを隠さなかった。『天皇が私を優先し過ぎる』との批判もあるかもしれないが、家族に愛を注がずして、国民全体に寄り添えるだろうか。

『人間らしさ』、芯となる伝統を守りつつ、時代に合わせて漸進的に変化する。そんな天皇像の予感がする」

また、漫画家の「ちばてつや」さんは「人を癒すお力をお持ちのお二人のやり方で、色々な方々を癒して行かれると思います」と述べています。（5月1日付け朝日新聞）

天皇陛下は、初の戦後生まれの天皇陛下でいらっしゃいます。私たち日本人の8割以上が戦後生まれです。産経新聞（5月1日付け）は、戦後70周年を迎えた平成27年のお誕生日のご会見を、私たちに紹介してくれています。

「私自身、戦後の生まれであり、戦争を体験していませんが、戦争の記憶が薄れようとしている今日、謙虚に過去を振り返るとともに、悲惨な体験や日本がたどった歴史が正しく伝えられて行くことが大切であると考えています」

両陛下には次のような歌会始の歌もあります。

天皇陛下
人みなは
姿ちがへど
ひたごころ

戦（いくさ）なき世を
こひねがふなり

皇后陛下
摩文仁なる
礎（いしじ）の丘に
見はるかす
空よりあをく
なぎわたる海

戦争の無い、平和な令和の時代を創っていきましょう。

……

北原 巌男
（きたはらいわお）
元防衛施設庁長官。元東ティモール大使。現（一社）日本東ティモール協会会長。（公社）隊友会理事